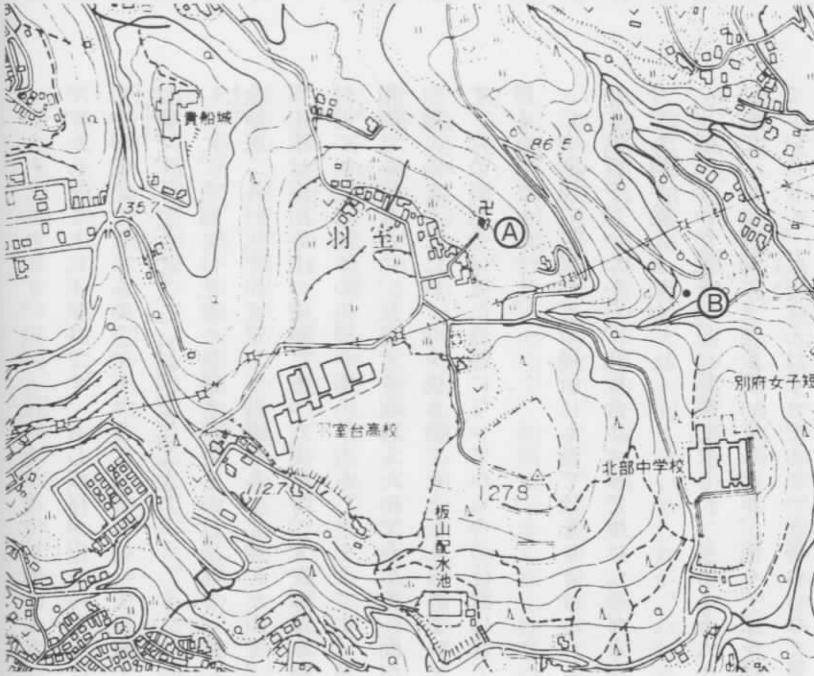
羽室御霊社と姫山メンヒル

夏の歴史探訪会



A御霊社　B姫山メンヒル

羽室台界隈の歴史

古代の羽室台地

亀川の後背地にあたる野田の羽室台地はかなり古くから開けた地域です。

　野田と北鉄輪にかけて一帯は、縄文式土器が出る周知遺跡として有名で、雨上りには野田地域の畑地の表面に今でもときどき縄文式土器の破片を発見することがあります。

　羽室台高校の建設工事にともなう調査発掘で、縄文文化時代の竪穴住居と呼ばれる住居址が発見されました。また、同時に農耕の始まりをしめす弥生文化時代の竪穴式の住居址と貯蔵穴が発見されて弥生式土器がいくつか出土しました。このような生活遺跡が発見される羽室台地は古代から民衆の暮らしが営まれていたのです。

中世の羽室台地

　台地北東側の亀川一帯は、奈良時代に聖武天皇が宇佐弥勒寺の荘園として「墾田百町歩」を寄進したので、竈門荘には百町歩の豊かな耕地が開かれました。この竈門荘は鎌倉時代になると大友氏の領地になり、地頭職の竈門氏が強力な権力を持つようになりました。

　竈門氏の名が初めて文献にあらわれるのは、弘安八年（一二八五）の「豊後国図田帳」（大田文・惣田数帳）です。

豊後国大田文案（平林本）

　竈門荘八拾町　同弥六寺領

　地頭

　本庄　五拾三町　御家人　竈門又太郎貞継　法名道善

　（他に竈門次郎貞継　道喜の記載がある）

　この台地は、鎌倉時代から南北朝にかけて竈門荘を支配した竈門氏の館があり、同氏一統の本拠地であったと思われます。

　この地頭職の名が忽然と記録から消えます。どんな事情があったのか記録がありません。滅亡の伝承もなく歴史から消え去った一族は墓地だけを残して、おそらく悲

運の最期を遂げたのではないかと考えられます。

近世の羽室台地

享保年間、西日本一帯に虫害が猛威をふるってたいへん深刻な飢饉になりました。この虫害（うんか・蝗）や疫病・災害を鎮めるために、野田の人々は、この地に縁のある鎮西八郎為朝の霊を勧請して災疫の折伏を祈りました。羽室御霊社の祭神は強い霊力をもった英雄豪傑の源為朝です。

御霊信仰と御霊社

人や動物は非業に死をとげたとき、その恨みの怨霊がこの世に残って色々な災いを起こすという考えがあります。まして、恨みを残して死んだ偉人や英雄豪傑の霊魂は、とくに強い祟りや災いをもたらすと信じられていました。この霊魂を「御霊」といいます。「御霊信仰」とはこのような人の霊の祟りを恐れて、その霊を鎮めるために祀ることです。

人々はこのような強い怨霊を祈り鎮めて、逆にその荒魂の力をかりて災いを折伏するための守り神として祀るのが「御霊社」です。

鎮西八郎為朝は為義の八男、性豪快で乱行が多く、十三才で父に追われて九州に勢力をはった。保元の乱で京に帰り、上皇方として奮戦したが敗れて大島に流され、狩野茂光に攻められて悲憤の自殺をとげたといわれます。

羽室御霊社は、墓地にとどまっている竃門氏の一族の御霊と疫病・災害・虫害を鎮めるために、享保年間に鎮西八郎為朝の霊を祀り、為朝の霊力で祟りや災いを鎮めようとしたのです。

伝説　鎮西八郎為朝の城址

鎮西八郎為朝の伝説が別府に残っています。（「別府史談」四号）おそらく羽室御霊社に為朝の霊を祀ったことから広まったものかも知れません。かつては、御霊社の古塔群を「為朝十二妃の墓」と呼んでいました。

「久寿二年四月、速見郡領大神惟敏父子及竃門庄司貞

継などを伐ち、羽室山の上に城を築き、其女達を質として、毎日弓術の練習を為せりといふ。十二妃の墓と称するもの、御霊神社の奥津城に在り、弓掛松と称するものは、東北面の亀川上水道浄水場の傍に残り、城は東南に突出せる岡阜に在りしと伝へ、今は城ケ塚と称す。

地域高燥にして、眼界豁大を極め、由布・鶴見・四極の連山及び速見灘一帯の風光歴々として眉宇の間に映ず、蓋し恰好の要塞地帯なり。以下略」

『大別府史蹟名勝－土屋公照氏編』

羽室台地は北東は険阻、背後に高地や丘陵を背負う城塞としては絶好の地形でありました。

竃門氏墓地五輪塔群　県有形文化財

（御霊社　別府市野田地区）

社殿に向かって左側にある一基は総高二、〇九米、水輪の四面に陰刻した月輪の中に金剛界四仏の種子を薬研彫りする。地輪の中央には三行にわたり

「嘉元四丙午（一三〇六）云々」

（正月廿一日　沙弥道善逝去　晨尅　「金石年表」）

の銘。他の一基は総高二、二一米、地輪の下に二段の基礎を置き、上段は二区に分かち格狭間を刻む。残りの一基は総高一、九五米。地輪の下に基礎を置く。各輪には金剛界五仏の種子と大日三身の真言が刻まれていて、この配列は珍しく、いずれも鎌倉時代の造立と推定される佳作である。

アク　キリーク　タラーク　ウーン　バン　（金剛界五仏）

ア　バン　ラン　カン　ケン　（大日如来法身真言）

ア　ビ　ラ　ウーン　ケン　（大日如来報身真言）

ア　ラ　ハ　シャ　ナウ　（大日如来応身真言）

この種子の配列は全国的に珍しく、鎌倉時代末期の頃に限られている。「県史美術編」

石塔について「大分県史　美術編（石造文化）抄」

県内の石造物は、平安時代の末期（十二世紀）から次第に出現し、鎌倉時代になると急速に数を増すようになった。ことに五輪塔と宝篋印塔は宗派をこえて造立された。

鎌倉時代中期頃までは巨大なほど功徳や利益が多いとされ、国東塔や層塔や宝篋印塔・五輪塔が創立された。

鎌倉時代末期・南北朝時代初期に塔の大小は功徳や利益に影響がないということになると、広範囲の階層の人々が石造品を作るようになり、石造美術の黄金時代を迎える。

南北朝時代末になると小形になり、しだいに彫法も萎縮してくる。室町時代の石造品との区別が困難になる。

室町時代に造立された大型の国東塔もあるが、形態が簡素になり、細部にこだわりすぎる反面、全体的に整わず、銘文・梵字に迫力が感じられなくなる。作品の小型化につれて、庶民のものが増え石造美術が大衆化し、簡素な一石五輪などが流行する。地蔵・十王像、庚申塔、仁王像などが造られた。

五輪塔　地・水・火・風・空（方・球・三角・半球・宝珠）の五大宇宙の生成要素をあらわし一切衆生を救済すると説く仏教思想。率直簡明の形式で、主に追善供養塔や墓碑。

宝篋印塔　宝篋印陀羅尼経を奉蔵する塔で、追善供養塔や墓碑。

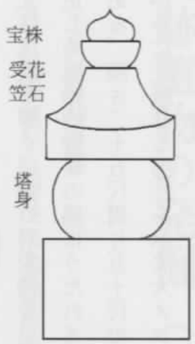
五輪塔の形式の変化　各時代の代表的な例

平安時代　傾斜のない火輪、樽形に近い水輪、横長の地輪

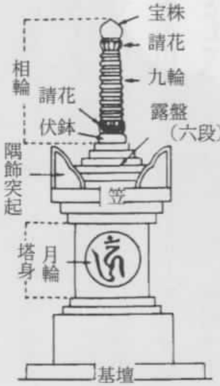
鎌倉時代　軒厚で四隅を直線で切る火輪、球形の水輪、方に近い地輪。全体に隙がなくどっしりとした格調高さが感じられる

室町時代　軒に反り四隅を斜線で切る火輪、銘文を刻みやすくするために縦長にした地輪。前代の風格をのこす

江戸時代　つきでた空輪、軒の反りの極端な火輪、縦長の地輪



五輪塔



宝篋印塔

梵字（種子）

梵語を表記する古代インドの文字。中国や日本では呪術的威力が強調される。梵字一字をあてて一定の仏菩薩をあらわす。

金剛界五佛

羽室御霊社五輪塔の正面

他の諸佛をあらわす種子

主尊	読み	種子
釈迦	バク	
大日（胎蔵界）	アーンク	
大日（金剛世）	バーンク	
薬師	バイ	
阿弥陀	キリーク	
観音	サ	
勢至	サク	
普賢	アン	
文殊	マン	
地蔵	カ	
不動	カーン	
弥勒	ユ	

姫山メンヒル

前出の『大別府史蹟名勝ー土屋公照氏編』に、

「別府を中心として、その周辺一帯の地に抑々何時頃から人間が住したかは、考古学上極めて興味ある問題として、此等について古代文献には残っておらねど当時の遺跡、遺物は幾多も存在していることによりて、先住民族の住居して居たことはその事実なるを立証するに吝ではない。

中でも代表的メンヒルとして、別府市亀川野田の姫山北面の山中にあるは巨石にして、先住民族の巨石文化財として、二千五百年以前、別府を中心として巨石崇拝時代の文化が燦爛としていたかが窺われる。周囲は神々しいまでに原始林に巡らされ、一度この霊地に入り先住民族の輝く信仰の対象物を見るとき、直ちに襟を正しめ原始的神秘の感にうたれる事を禁じ難いものがある。高さ二十五尺周り五十尺の自然の巨石は、見るからに荘厳なる男性を示す大メンヒルなり。」

とかかれています。

巨石信仰は一種の自然崇拝で、超美なるものや巨大なものに特殊な霊が篭ると考えて、その威力を鎮めその加護を願う原始的な信仰です。御霊信仰もこれに似た信仰でしょう。

「メンヒルとは、巨石記念物でほとんど加工を加えずに単独で地上にたてられたもので、先史時代の信仰記念物と考えられ、ヨーロッパ西部、ロシア南部、東アジアなどに分布する。立石である（「考古学事典」）」。

姫山の巨石については、地域で古くから信仰の対象として伝承があったものと思われるが、別府市が昭和八年「別府市誌」の編纂にあたって、鳥居龍蔵博士を招き先史時代の調査を依頼した際に、鳥居博士が命名したものと思われます。当時博士はその外に長松寺境内のドルメンや立石山メンヒル、金比羅山ストンサークルなど多くの巨石に命名しました。

現代の考古学においてはいずれの遺構も疑問視され、考古学的な学術資料として扱われていませんが、別府市にとっては数少ない民俗学の資料として貴重なものと思われます。

（文責　入江）